

コミュニケーションは情報伝達か

柳 瀬 陽 介
(広島大学大学院)

1. 常識的コミュニケーション観

コミュニケーションという言葉が、英語教育の檜舞台に出て久しい。しかし、コミュニケーションあるいはコミュニケーションあるいはコミュニケーションといえ、何か「いいこと」として無自覚に口頭上ってきたようにも思える。そして、新指導要領にも、オーラルコミュニケーションといういささか面妖な用語が導入されるという。だが、「英会話」に代わって、(オーラル)コミュニケーションという言葉がどれだけ流布しようと、私たちの持つコミュニケーション観が、旧態以前の常識的なものに留まっている限り、英語教育にはなんら実質的な変化はないだろう。本論文は、コミュニケーションの意味を問いなおし、英語教育におけるコミュニケーションについて考察するものである。

常識的には、コミュニケーションとは「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」、コミュニケートするとは「伝えること。伝達すること」(大辞林)となっている¹⁾。言い換えるなら、コミュニケーションとは、話者Aが伝達内容Xを言葉に託して、聞き手Bに伝えること——情報伝達ということになる。

伝達とは、「命令・連絡事項などを取り次いで伝えること」(大辞林)であり、一方向的、一義的なものと考えられるから、コミュニケーションを情報伝達としてとらえると、コミュニケーションの成功とは、Aが、伝達内容Xを、元のまま聞き手Bに伝えられるように言葉に託し、実際BもAの発話から元通りのXを解読することとなる。

いうまでもなく、これはコードモデル的コミュニケーション観であり、この近代的原型はシャノンとウィーバー(1949)に求められる²⁾。彼らは、このモデルをあくまでも、通信工学の基になる情報理論としてとらえていた。ここでの伝達内容とは、例えば文字列'communication'であり、コミュニケーションの成功は、それをいかに他の文字列と間違えられないようにノイズを抑え、モールス信号等に符号化し伝達するかであった。ここにおいて、問題なのは記号の伝達そのものであり、伝達内容の人間による意味解釈は不問に付されていた。'Communication'という情報が聞き

手にとってどんな意味をもつのかという問題は、賢明にも理論から外されていたのである。しかし、この単純明快なコミュニケーション理論は、それ以降の言語理論において、やや無思慮に拡張的に援用された。記号の伝達にとどまらず、人間による記号の解釈もコードモデルで説明できると仮定したのである。その一例はヤーコブソン³⁾にも見られる。しかし、人間の言語によるコミュニケーションは、はたして「情報伝達」なのであろうか。コードモデルで説明しうるものなのだろうか。

スベルバーとウィルソン⁴⁾は、コード内からの情報だけでは、コミュニケーションを説明できず、必然的にinferenceが必要であること、そしてそのinferenceはrelevanceの原則をもって初めて説明できること等を主張した。本論文では、彼らのように、コミュニケーションの過程の原理的な説明の点からコードモデル批判を試みるのではなく、コミュニケーションにおける伝達内容Xの実体化の虚偽を指摘することによって、コードモデル的・情報伝達的コミュニケーション観を批判したい。

次の会話を考えてみよう。

(1) (夕食時の夫婦の会話)

A1 (夫、ビールを飲みながら)「まったく近頃の若者はわからん。自分の主張だけはするんだが、人の気持ちなど少しも汲もうとしない。だいたい…(中略)なあ、お前もそう思わんか」

B (妻、つまらなさそうに煮しめを食べながら)「ええ」

A「あいつらは、どんな育ち方をしたんだろう…(中略)戦後教育のせいかなあ、やっぱり」

B (漬物をほおばりながら)「ええ」

A「あいつらには人の話を聞く態度ができとらんのだ。いくら仕事ができたとしても、あれじゃ社会人失格だ」

B (テレビに顔を向けながら)「ええ」

A「おい、ところでお前わしの話を聞いてらんか」

B (夫の方に向きなおって)「ええ」

実際、Bは聞いているのだろう。求められれば、BはAの発話の「情報」、すなわちトピックが若者批判であることを述べることができるであろう。しかし、

上の例を私たちはコミュニケーション（の成功）と呼べるだろうか。コミュニケーションには、情報伝達以上のものがあるように思える。

しかし、情報伝達以上と述べたが、そもそも、情報伝達といっても、コードモデルが想定するように、伝達内容Xを符号化する話し手Aは、Xを掌握しているのであろうか。次の例で、考えてみたい。AがCという人についてBに語っており、Bは、そのCなる人物について全く面識がないと仮定する。

(2) A「彼は、やたらと他人の生活に興味を抱くんだ。この間も電話で僕の…（中略）まったく、いったいどうしたっていうんだろう」

B「彼は淋しいんじゃないの」

A「そうね。そういえばそうなのかもしれない」

この会話例では、Aによる第一の発話の中に、BがCに関する新たな情報を見いだしている。Cなる人物を知っているのはAだけであったにもかかわらず、また発話主体はBでなくAであったにもかかわらず、Aは自らの発話のもつ全ての情報を事前に知ってはいなかった。AはBの反応を聞いて、自らの発話のもつ（潜在的）情報＝意味にはじめて気が付いたといえよう。

同様な例はいくらでもあるだろう。

(3) A「Dさんが、午後この部屋にくるそうだよ」

B「それじゃ掃除しとかなきゃ。あの人は整頓にうるさいからね」

A「そうか、うっかりしてたな」

ここにおいても、話者Aの第一の発話の（潜在的）情報＝意味を見いだしたのは聞き手Bである。脱文脈化された「文」(sentence)においてなら、あるいは一義的な「文字通りの意味」を設定することも可能かもしれない。むしろ、抽象化された文を対象にする言語学に慣れ親しんだ者にとっては、「文字通りの意味」こそが全ての出発点ですらあろう。その考えに従えば、発話者は自らの発話の「意味」を十全にとらえていることになる。

しかし、上の例でみてきたように、文脈の中での「発話」(utterance)の情報・意味は始めから確定されているものではなく、話し手と聞き手の negotiation の中で初めて現れてくるものなのである。そして、コミュニケーションの単位は、「文」ではなく「発話」に他ならない。

それでは、意思・感情・思考はどうであろうか。話者はそれらをすべて掌握しているのだろうか。しかし私たちは、思わず言ってしまった言葉の強さに自分で驚き、自分の感情に初めて気付くことがある。思考にしても、言葉を袖だしながら、自分で「いや、というよりは…」と、話しながら考えているのが明白に観察できる例も多々ある。この場合、話者は予め思考とい

う伝達内容を知っていたわけではない⁵⁾。

意図についてはどうだろう。確かに、人を操作しようという時、私たちは自らの「意図」を明確に意識している。例えば、権力者が、オブラートで包んだ物言いで、断われない頼み事を他人にする場合、話者の意図は予め決ってしまっており、それはコミュニケーションの結果変わることはない。後は頼み事を成就させるために言葉遣いに腐心するだけである。しかし、このような例は、ハーバーマスの言葉を借りるなら戦略的行為⁶⁾であり、コミュニケーションの典型例とは言えない。ここでの関心はもっぱら目的の成就にあり、聞き手は単に操作されるだけの存在だからである。段々と明らかにしてゆくつもりだが、コミュニケーションにおいては聞き手は主体的存在である。

コミュニケーションの典型例と考えられる会話においては、私たちは自らの発話の〈意図〉を明確には意識していないのではなかろうか。次の例で考えてみたい。

(4a) (A, Bともに音楽を聞きながら)

A1「この曲、どこかで聞いたことがあるような気がするんだけど」

B1「これモーツァルトだよ」

A2「クラシックもたまにはいいね」

ここでの、A2の〈意図〉とは何だったのであろう。その〈意図〉はAだけが知っており、Bに伝達するものなのであろうか。いや、むしろAは、まさにA2と言っただけであって、とりたてて〈意図〉などはなかったのではなかろうか。A2におけるAの〈意図〉は、次にくるB2の発話によって規定されてゆくといえよう。

(4b) A1「この曲、どこかで聞いたことがあるような気がするんだけど」

B1「これモーツァルトだよ」

A2「クラシックもたまにはいいね」

B2「なんならCD貸そうか」

A3「いやそこまでしてくれなくてもいいけど」

ここでは、A2の発話の〈意図〉を強いて挙げるなら、それは、B2という反応によって、「この音楽を自分一人だけで聞きたい」ではなかったという形で事後的・否定的に規定されたわけである。

B2の反応が変わればA2の〈意図〉も変わる。

(4c) A1「この曲、どこかで聞いたことがあるような気がするんだけど」

B1「これモーツァルトだよ」

A2「クラシックもたまにはいいね」

B2「ね、ロックだけが音楽ってわけじゃないでしょう」

A3「まあね」

この場合のA2の<意図>は、さしずめ「クラシック音楽の良さを認める」ことにでもなるのかもしれない。しかし、これはB2あつての<意図>である。<意図>は事前に決定されていたわけではない。

逆説めいた言い方だが、コミュニケーションにおいて、情報は伝達されない。なぜなら、話し手の伝達内容Xである発話の意味は、話し手の頭の中にあるだけでは確定されていないからだ。不確定なものを「符号化し、伝達する」ことは論理的に不可能である。符号化による伝達とは、 $X \rightarrow Y \rightarrow X'$ で $X=X'$ を目指すことである。人間のコミュニケーションでは、そもそもXが確定されていない以上、符号化による伝達などありえない。私たちは、自分の頭の中に予め実在する「言いたいこと」を符号化し、発話するのではない。そうではなく、聞き手と共に理解される発話が、「自分が思ったこと」なのだ。発話の意味は、会話の中で初めて現れてくる⁷⁾。コミュニケーションは、コードモデル的な情報伝達としてはとらえ難いではなからうか。

また、コードモデルに従うならば、話し手は聞き手に情報を伝えるだけであり、話し手は聞き手から何も得るものはないということになる。しかし、コミュニケーションにおいて、聞き手は単に情報を知らない劣った存在にすぎないのであろうか。

まず、コミュニケーションにおいて、聞き手の果たす役割が皆無ではないことは、講演といった一見一方的な状況においてさえも明かである。聴衆の多くがあくびを連発したり居眠りをするならば、講演者はおそらく原稿を離れてでも、懸命に話を分かりやすく、おもしろく変えるであろう。

2人の間での対話においては特に、話し手は聞き手からの影響を受ける。聞き手はその人独自の働きを示す。打てば響くように反応する聞き手は、話を豊かにし、さらには話し手の盲点であった側面に言及して、話し手の考えを発展させる。また、このように聞き手によって話し手が変容を受けるのは、聞き手が話し手より優秀な場合だけではない。認知心理学者の三宅なほみは、理解の遅れている者による批判・応答によって、より理解の進んだ者が一層理解を深める様子を報告している⁸⁾。コミュニケーションにおいて、聞き手は単なる添えものではない独自の存在である。コミュニケーションによって、話し手だけでは思いもよらなかったことが生じてくる。コミュニケーションは一方的な情報伝達の応酬ではない。

情報伝達的コミュニケーション観は、聞き手の果たす役割を過小評価している。コードモデルでは、聞き手は取り替え可能な任意の読者であるが、実際のコミュニケーションでは、聞き手は決して無個性的な存在ではない。コミュニケーションは、この私と独自の

関係をもつ取り替え不可能な聞き手=この相手がいる、はじめて開始される。パフチンという。

発話の本質的な(生来の)特徴は、それが誰かに向けられていること、それが宛名をもつことである。言語の有意義な単位——誰のものでもなく誰にも宛てられていない個性を欠いた文や語——とはちがって、発話は作者をもつ(ということは表情をもつ)し、受け手をもつ。この受け手は、日常会話の直接の参加者でもある話し相手のこともあれば、文化的コミュニケーションのなにかある特殊な分野の専門家たちの、他とは区別された集団のこともあれば、国民、同時代の人々、同志、反対者や敵、部下、上司、目下の者、目上の者、近親者、他人といった多少とも区別された人間集団のこともある。またそれは、(情動的タイプのさまざまなモノログの発話に見られるように)まったく不特定の、具体性を欠いた他者のこともある。受け手がとる以上のすべての形態や概念は、当の発話が属する人間の活動や生活の分野によって定まる。誰にその発話が宛てられているのか、話者(あるいは書き手)はその受け手のことをどう感じどう考えているのか、どのような影響力を受け手はその発話にたいしてもつのか——それによって発話の構成も、また殊にスタイルもちがってくる⁹⁾。

他ならぬこの相手とのコミュニケーションは不可避免的に独自のものである。コミュニケーションを「客観的」ととらえて、この私とこの相手との緊張関係を消失させてしまうのは、「情報伝達」という言葉の貧しさだろう。

コミュニケーションを「意思疎通」ととらえてみても大差ないように思える。例えば、聞き手が、話し手と意思が「疎通」したとしても、聞き手がニコニコして、「君の気持ちはわかった」とだけしかいわないなら、そのコミュニケーションは、満足ゆくものであるとはいえない状況はいくらでもあろう。コミュニケーションにおいては、意思が疎通する——すなわち共有される——以上のことが多々起こるのである。コミュニケーションでは、話者一人では考えられなかったことが起こる。情報・意思伝達にせよ、意思疎通にせよ、常識的語彙ではコミュニケーションは語りきれない。

2. 共働的テキスト理解行為としてのコミュニケーション

情報伝達といった日常語が役に立たない以上、私たちはコミュニケーションを説明する言葉を新たに構築しなければならない。

コミュニケーションの典型例である会話はどのように始まるものだろう。ここでは、どんな話者も自ら返

答者でもあるというバフチンの指摘に注目したい。

話者の誰もが、程度の差はあれ、みずからも返答者なのである。というのも、彼は宇宙の永遠の沈黙を最初に破った話者ではないからで、彼は自分の使用する言語が体系として存在するのを前提とするだけでなく、先行するなんらかの発話——自分や他人の発話——をも前提としており、それらと、彼の所与の発話はなんらかの仕方に関係しているからである（それらに依拠する、それらと論争する、あるいは単に聞き手がすでにそれらを承知しているのを前提にする、といった具合に）。どんな発話も、他のさまざまな発話がつくる非常に複雑な連鎖の一環なのである。¹⁰⁾

人は突然、全くの虚無の中から発話するのではない。話者は、言語によって基礎づけられた<状況>すなわちコンテキストの中から、あるテキストを読み取る＝創り上げる。それは、その日の天気についてかもしれないし、今しがた読んだばかりの本についてかもしれない。

この、無限ともいえる広がりをもつコンテキストの中からのテキスト読解＝創造は、所与のテキストのリストから、ひとつだけを取り出すというものではない。同じトピックでさえも、視点を変えることによって、いかようにも語れることからわかるように、どんなテキスト読解＝創造も、話者なりの理解に裏付けられたものである。ある発話に、敵対者は皮肉の色を、賛同者は小さな見解の不一致を、方言学者は音声特徴を読み取るかもしれない。また、ある部屋に、建築家は素材の不備を、友人は住人の個性を、読書家は住人の知性を読み取るかもしれない。テキスト読解、より一般化していえば、テキスト理解は独自のなものであり、その意味でも創造的である。

その理解は発話という形で表出され、公的なものとなる。話し手は、状況＝コンテキストを自分なりに理解＝表出＝発話する。その発話が、今度は聞き手のテキストとなり、聞き手はそのテキストを、それを取り巻くコンテキストの中で理解する。

理解といっても、それは単なる受動的な状態ではない。人の話を理解するとき、私たちは、少なくとも肯くといった行為で理解を表出する。さらには、合の手、あるいは反論といったもっと積極的な言明化で聞き手は理解を表出する。逆にいえば、全く表出しないもの、例えば壁、あるいは僅かな表情さえも悟られまいとうつむく生徒は、理解していないこと、もしくは自分は理解していないと主張したいこと、を示している。

理解が表出されず、私的なものにとどまる限り、その理解は妥当性の判断ができない。つまり「私的な理解」という言葉は言葉遣いとして適切ではないがゆえ、私たちは表出する限りにおいて理解していると

いえる。その意味で、理解とは表出である。

コミュニケーションについてまとめてみよう。私たちは<状況>の中であるテキストを理解する。この場合、その理解とは発話に他ならない。そのテキスト理解＝発話が、聞き手にとってのテキストとなり、聞き手はそのテキストを自らの発話という形で理解する。これが、聞き手が応答という形で話し手になる過程でもある。コミュニケーションとは、話す主体の交替を伴う「テキスト理解」である。

「テキスト理解」という言葉には、それが個人的に遂行、完結されるものではないことを表す形容詞がつけられるべきだろう。「共同的」でもいいが、残念ながらこの言葉は共同体という言葉と結び付けられて考えられやすい。筆者は、<共同体>とは「ある言語ゲームを共有する閉じられた領域」であり、それに対して「共通の言語ゲームを前提としえないような他者と出会う場所」を、<社会>と呼ぶ柄谷行人¹¹⁾の言葉の使い分けを踏襲したいので、共同的という言葉は避けたい。現代の英語とは単一の同質文化内で話されている言語ではないからである。

「相互作用」といった用例にみられる「相互的」でもよさそうに思えるが、この言葉には「相互扶助」「相互依存」といった用例が示すように、単に一方向の流れが2つある、単なる「双務的」な意味合いもあるので、この言葉も除外したい。結果的に、複数の主体が共に働きかけるという意味で、ややこちないが、「共働的」としたい。

そしてこの共働的テキスト理解は、状態ではなく、行為である。発話という形で、共働的にテキスト理解をする話者は、自らの発話に責任をもたねばならない。彼は、求められるなら自らの発話の妥当性を相手に対して示さなければならない。発話には責任が伴い、それは主体が選択して行うものである。共働的テキスト理解は決断を含むものであり、その意味で行為である。あくまでも、作業仮説としてだが、ここでコミュニケーションを「共働的テキスト理解行為」と捉えなおしてみたい。

3. 英語教育とコミュニケーション

コミュニケーションを共働的テキスト理解行為としてとらえると、英語教育で、コミュニケーションは、中学よりは、むしろ高校、大学レベルにおいて実現されるものだけということになろう。コミュニケーションの参加者には多義的なコンテキストの中からテキストを独自の理解する＝創り出すことが必要だからである。そして、そのテキストは当該言語によって基礎づけられたものである以上、コミュニケーションの前提条件として、参加者は英語で構築された世界を経験し

ていること、典型的には広く英語で読書をしていることが必要となる。それらの前提があって、はじめて学習者は共働的にテキスト理解行為に従事できる。

また、こうしてみるなら、いわゆる「会話教材」のコミュニケーションへの非有効性が浮かび上がってくる。コミュニケーションは、この私とこの相手とのせめぎ合いの中に現れてくるものであり、口頭表現のリストに閉じ込められるものでも、ドリルに還元されるものでもない。「会話教材」は、せいぜいコミュニケーションの端緒となるだけであり、それ以上に、学習者の問題意識になかった文学とか論文等を共に「読む」方が、よほどコミュニケーションを目指した授業となる。もちろん、「読む」とは単にそれらを全訳することではない。

教科書をあくまでも product としての text¹²⁾ としてしか捉えないなら、英語教師はせいぜいそこに現れた語彙、文法の解説・説明をするほかない。いわゆる文法・訳読式授業である。無論こういった授業が、外国語教育においては有効であった(無意味ではなかった)という点は認めるものの、学習者の目標言語でコミュニケーション能力獲得にはそれだけでは十分でないことは今や明かである。外国語教師には、テキストの解説以上のことが求められている。

Product としての text は、極端にいえば、単なる文字列に過ぎない。教師は、それを基に、学習者と共にコミュニケーション＝共働的テキスト理解行為を図るべきではなからうか。教科書そのものは何も語らない。教師は text の秘めた潜在的問題を掘り起こし、それを学習者への問題へとしていかねばならない。教科書を、この学習者たちとこの私のテキストにせねばならない。この意味で、教科書は学習者に訴えてくる内容をもったものであるべきである。

おぞなりの内容を扱った中途半端な「会話教材」には、学習者は自分の理解を示す契機を見いだせない。内容のないところに会話は生じ難い。そこから生み出るのは、せいぜい自己のコミットメントのない死んだ「英語表現」である¹³⁾。二人が口頭で話せば、即それがコミュニケーションというわけではない¹⁴⁾。無論、英語表現の教授が無駄といっているわけではない。実際、notional-functional syllabus は、従来の機能を無視した文例集に比べて画期的なものである。しかし、それもリストに過ぎない。リストといった静的な知識だけではコミュニケーションを準備できないのである。コミュニケーションは状態でなく、行為であり、過程である。コミュニケーションは静的に教科書の中に記述できない。また、コミュニケーションが独自のものでもある以上、コミュニケーションを予めプログラムしてしまっておくことはできない。逆説的

に聞こえるかもしれないが、コミュニケーションは、コミュニケーションを通じてしか学べないのである。

学習者はなにか言語を使った活動に従事しなければならぬ。学校教育において、その活動は、典型的には教科書というテキストをこの私という教師が、この学習者と、共働的に理解することからはじまろう。当初のテキストに加えられた学習者の理解＝表出が、さらにテキストとなるのであるから、この場合のテキスト理解とは、単に教科書を理解するだけではなく、教科書を理解する学習者をも理解することでもある。(学習者の立場からすれば教師を理解することともなる。)

コミュニケーションを共働的テキスト理解行為としてみると、1970年代以降のコミュニケーション言語教育の動きは、言語教育におけるコミュニケーションの実現というよりは、language in use の強調として総括されるべきだと思える。Widdowson はこの転換を、みずからのテーゼであった teaching language as communication を teaching language for communication へと変更することによって正したと考えられる¹⁵⁾。教育の目的性とコミュニケーションの自由さを考えると、(teaching language) as communication は余りにも非現実的であろうし、teaching (language as communication) では、言語を静的に捉えてしまい、単なる表現リストにしかたえられない。さらには、language as communication のみ教授し、文法を無視するならば、外国語習得がおそろしく非現実になることは、現場の者、最近の文法の復権事情が証言することである。そこで、(teaching language)for communication となるわけである¹⁶⁾。

しかし、(teaching language)for communication という言い回しでは、まだ言語の動的な側面を捉えきれない。'Language' が名詞 (substantive) であることから、私たちは 'language' を実体的 (substantial) なものと考えがちである。だが、言語には現実の communication において生き生きと現れる過程的な側面がある。言語の実体化は、この側面を見逃しやすい。そこで、筆者は teaching language for communication に加えて、learning to communicate through communication というテーゼをも提唱したい。

社会慣習的な interpersonal function は「教えられる」かもしれない。しかし、他ならぬこの自分の言語化である ideational function だけは、自ら「学ぶ」ほかないのではなからうか。(textual function も「学ぶ」ほかないのかもしれない)。学習者自身が、教師と共働的に「テキスト」を理解することは、その意味で学習者の言語能力向上に寄与するように考えられる。学習者は自らの理解を発話という形で表出し、その理解

は、目標言語に通曉した教師との negotiation によって、目標言語社会に通じる公的なものと育ってゆくからである。teaching language for communication に加えて、learning to communicate through communication というテーゼも必要ではなからうか。一方的な「教授」でなく、共働的なコミュニケーションが、学習者の ideational (and textual) function 習得を援助する。コミュニケーションを「情報伝達」と捉える限り、コミュニケーションは授業のゲーム化によってのみ可能な、色添えものに過ぎないが、それを「共働的テキスト理解行為」と捉えるならば、コミュニケーションは上級の英語教育における中核となる。

文法訳読式授業から、文法教授を残し、それに言語の機能的な側面 (language in use) の教授を加え、コミュニケーションすなわち共働的テキスト理解行為に従事していくことが、今後の英語教育のとるべき道ではなからうか¹⁷⁾。

注および参考文献

- 1) 英英辞典の定義も大差なく、'to give or exchange information, messages, etc.' (Webster's New World Dictionary) といったものである。
- 2) Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *Relevance: communication and cognition* Basil Blackwell: Oxford 第1章
- 3) ヤーコブソン, ローマン著 田村すず子他訳, (1973), 『一般言語学』, みすず書房, 第11章, なお種々のコミュニケーション論の概要については、内川芳美他編 (1973) 『講座 現代の社会とコミュニケーション1 基礎理論』東京大学出版会, 尾関周二 (1989) 『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店などが参考になる。
- 4) Sperber & Wilson 前掲書
- 5) 言語と自己の関わりについては、拙論『言語において理解されるべき自己の所在』(中国地区英語教育学会研究紀要第20号投稿予定)を御参照頂きたい。
- 6) ハーバーマス, ユルゲン, 河井倫逸他訳 (1985) 『コミュニケーション的行為の理論 (上) (中)』未来社
- 7) 前掲拙論を参照頂きたい。
- 8) 三宅なほみ, 「理解におけるインターラクションとは何か」, 佐伯 編, (1985) 『理解とは何か』東京大学出版会所収
- 9) バフチン, ミハイル, 新谷敬三郎他訳, (1988) 『ことば 対話 テキスト』新時代社, pp. 180-181
- 10) バフチン前掲書, pp. 132-133.
- 11) 柄谷行人, (1986) 『探究 I』, 講談社
- 12) Widdowson, H.G. (1975) *Stylistics and the teaching of literature* Longman: London
- 13) 英語教科書の可笑すべき言葉遣いについては、清水義範 (1988) 『永遠のジャック&ベティ』, 講談社を是非御参照頂きたい。
- 14) この意味で、指導要領のオーラルコミュニケーションという用語は、安直な理解つまり誤解しか生まないのではなからうか。また、コミュニケーションをオーラルと限定しているが、それはコミュニケーションのコンテキストの中から、読物、visual なもの (TV 教材等) を排除することも意味するのだろうか。頭だけでコミュニケーションが成立するのは、電話といった特殊な状況だけだろう。このオーラルという限定詞は一体何のためにつけられたのか、筆者にとっては不可解である。「オーラルコミュニケーション」は、以前の「英会話」と一体どこが違うのだろうか。
- 15) Widdowson, H.G. (1984) *Teaching language as and for communication*. in *Explorations in Applied Linguistics 2* Oxford University Press: Oxford.
- 16) teaching (language for communication) は無理な解釈であろう。なぜなら、コミュニケーションに使われない言語は原理上ありえない。'Language not for communication' がありえない以上、'language for communication' というフレーズは無意味である。
- 17) とはいえ、学習者は目標言語に習熟していないのだから、そもそも「共働的」にテキストを理解できるのかという疑問がでるかもしれない。教師と学習者の間にコミュニケーションは可能かというわけである。これについては、言語に習熟した者とそうでない者との間のコミュニケーションに着目して考察したいと考えている。親と乳幼児の<垂直的コミュニケーション>と、成人同士の<水平的コミュニケーション>の中間的なコミュニケーションは存在し、その<斜めのコミュニケーション>は、人間の社会化であり、教育でもあると考えているのだが、詳しくは後日改めて論考したい。